「黒いノート」より

村田修子

色はあせてしまっているけれど、黒い皮のついた小さなノート。

ずっと、ずっと以前に大切なことを書いておいたのに、どこにしまい込んでしまったか分らなかったノート。

その迷子にしてしまっていたノート、それがあった。中には、きらきらと光る宝石のように貴重なものがつまっている。それは思ったまま大胆で率直で、そしてせん細な感覚を持った。不思議とさえ感じられる、こどものことば。

青リンゴ

おりんご　どうして青いの
おりんご　びょうきなの
それで　ねているの（もみ殻の中）
そう、じゃ　ねていなさい

蛾

蛾、蛾、ガラス窓にいるわ
しよい（白い）おようふくで
あかい　飾りがついて
とっても　すてき
バレー　みたい

にがしたとんぼ

とんぼさん　へんなとびかたね
お羽いたくして　ごめんなさい
かえったら
お医者さんに　いきなさいね

ほたるぐさ

ほたるぐさは青いから
とらないで見てましょう
かわいそうだからね

しびれ

足の裏で　小さい虫さんが
たーくさん　ちくちくって　あるいてるの
あっこ　くすぐったくって　笑いそう

夜

そと　みてごらん
さみしいわよ
木があって　お月さまがあって
風があるわよ、夜だから

おかあちゃま

お鼻とお鼻とくっつけよう
おかあちゃまのおめめ、一つになっちゃった
はなしましょう
おめめ　二つになった
ああ、よかった

がけの上で

ここ、こわいわ
おっこちそうね
おっこちたら　しんじゃうわね
しぬといたいもんね
おかあちゃま　おっこちないでね
しま（な）ないでね

以上は何かにつけて口をついて出る幼児である妹のことばを、そのまま消してしまうことを惜しんだ小学校六年生の姉が書きとっておいて私に見せてくれたものです。

このことは私に二つのことを教えてくれました。

一つはいうまでもなく子どもの創造性の豊かさ、不思議さ、神秘さ。それは本で読み、また子どもについて学んだことがそのままくりひろげられた感じです。

もう一つは、余り活発ではなく、どちらかというと引込思案で自分を表に出さないこの子について、経験の少なかった私は、たしかに心配の目でばかり見つめていました。

これを見せてもらったことによって、人それぞれの中にひそむすばらしいもの、派手に表現することをしない人の中にも、それぞれのすばらしいものが息吹いているのだ、ということを考えるきっかけを与えられたことです。（お茶の水女子大学附属幼稚園）